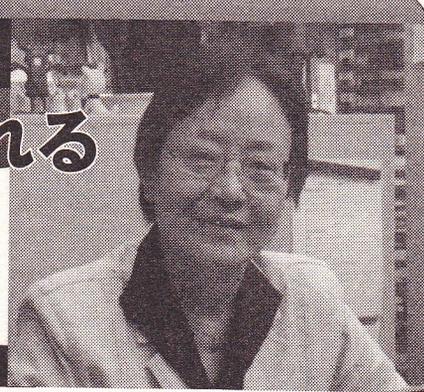


くれたら…

患者のズレ』を修正してくれる

ナース誕生



岡山の、とある基幹病院で起きた出来事である。

恭子さん(53)は、突然腹痛を訴える母(80)を近くの救急病院へ連れていった。腸閉塞と診断され入院、医師から「鼻から管を入れて、腸にあるポリープを取らないと命が危ない」と言われた。80歳とはいえ、母はそれまで元気に暮らしていた。「すぐ処置すれば大事に至らないだろう。1週間くらいで退院できるはず」

しかし処置後、母は呼吸がおかしくなった。心配になって医師に尋ねても、答えは「大丈夫です」。そんな日々が1週間続いた後、恭子さんは想像もしていなかった宣告を受ける。

「声帯が動かなくなっています。気管切開をしないと」

「医師の言っていることが理解できない」「自分の思いが医師に伝わらない」。あなたも、こんな経験をしたことはないだろうか？ 日本医師会の調査では、患者の半数は医師に「ズレ」を感じている。その「ズレ」を解消すべく、新たな資格、「メッセンジャーナース」が誕生した。

ジャーナリスト 塩田芳享

死んでしまいますが、どうしますか？」

気管切開をすれば食べることも難しくなるので、胃に管を通して人工的に栄養を送り込む「胃ろう」も必要になる。

突然の宣告に、恭子さんは一瞬パニックになった。使用者数が急増し、一説にはその数が56万人とも言われている胃ろうだが、昨今、その是非は問われている。

「延命治療は本当に必要なのか」という問いだ。意識のない母は答えを出せる状況にない。その時、恭子さんはふとクリスチャンだった母が「延命治療はいい」と口にしてたことを思い出した。

「母は延命治療は望んでいないと思います」と医師に

告げると、医師の表情が急に冷たくなったように恭子さんは感じた。「口には出しませんでした。カチンときたんですけどね。自分は命を救おうとしているのに、この娘は何を考えてるんだって」

患者の苦情・相談は年4万件

医師から、気管切開や胃ろうの説明はなく、「家族でよく話し合ってください」結論を出してほしい」とだけ言われた。一度は延命治療はいいと言った恭子さんだが、医師の態度で大きな迷いが生まれた。

ただ生かされ苦しむのは嫌だと思ふ患者や家族は、延命治療を無駄だと思ひ、「命を延ばす」ことを第一に考える医師は無駄とは考えない。そこに、患者と医師との「意識のズレ」が生まれる。

家族間にもズレは生まれる。弟は「良くなるなら気管切開をするべきだ」と言

い、状況が詳しくわからない父は感情的に「助けてやってほしい」とだけ言った。延命治療をしたら、その後どうなるのか、しなかったらどうなるのか、恭子さんはそれが知りたかった。しかし「それはわからん」と医師からは突き放され、看護師は忙しく、取り付く島もない。

「本当に悩みました。相談に乗ってくれる人も全くいませんでしたから」

結局、延命治療を受け入れ、それから半年たった現在、気管切開され、胃ろうをつけた母は苦しまずに暮らしている。それでも意識が戻った当初、いつも温和な母が、のどに穴が開いて話せなくなった状況に怒りをあらわにしたという。

「終わったことをとやかく悩んでも仕方ありませんが、もっと良い選択があったのではと、今でも悔いが残っています」

医師との意識のズレによって、納得のいく診療が受けられないケースは多い。